花火

瑛彪・玄彪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花火

【Ｎコード】
Ｎ０６２８Ｂ

【作者名】
瑛彪・玄彪

【あらすじ】
気まずいふたりの淡い恋。超長編自作小説の一片ですが、読み切りなのでご安心ください。今年の夏、短編小説風にリニュアール予定です◎

・

早起きのセミが、我先にと鳴き始めた。

今日も暑くなりそうだ。

寝癖を直しながら、空いてる方の手で、日めくりカレンダーの昨日を剥ぎ取る。皮がむけてピカピカの今日の日付を見るなり、僕の動きがフリーズした。

八月十三日。

この日が金曜日に当たるなんて、祭り好きの僕は花火大会のことで頭がいっぱいで、まったく気づかなかった。

毎年八月十三日は、白河花火大会の日。

何もないこの町が、キラキラ輝きを放ちながら活気付く日である。

それが、こんな不吉な日付になるなんて。

今日は何も起こらない平和な日になりますように・・・と願いはするけれど、何も起こらないはずがない。第一、花火大会という夏の一大イベントがある。町中が浮かれるのだ。無事でいられるはずもない。むしろお祭り野郎な自分が、今日一日音無しくしていられるかの方が問題である。

とにかく、自習帰りに見れたら見る、と家に云い残して、自分に

云い聞かせて、僕は家を出た。

上

８時だというのに、気の早い太陽がジリジリと肌を攻めてくる。
信号でいったん自転車を停め、空を見上げる。
そこには、どこまでも澄みきった青が広がっていた。

この分だと、花火大会は決行だな。

自然とペダルをこぐ足が速くなる。
まだ今日が始まったばかりだというのに、と苦笑いする。

花火大会、と聞いて思い出すのは、この会話。

「十三日、花火大会があるんですよ。どおしましょぉ～」

ばんばんっと両手で職員室のデスクをたたく僕。

「見ないほうがいいんじゃないか？俺んときは自習してたよ。」

あごをさすりながら平然と答える青年。司法修習生・河口氏（二十五）である。彼は去年司法試験をパスし、現在は裁判官になるべく修行中の身だ。法曹を視野に入れている僕の憧れの先輩である。
その日彼は、後輩である僕ら；大学受験生の様子を見に来て、その帰りに立ち寄った職員室で、かつての恩師と昔話に花を咲かせて

いた。ちょうどそこへふらりと来た僕が捕まり、話の輪に加わったのだが、僕と先輩が熱くなり、いつのまにか二人で話し込んでいた。
（あれ、先生は？）
彼のあっさりとした答えを聞いた僕が、ん～やっぱり受験生と花火ってムエンなのかしら、という顔をしたら、川口氏は、
「そう云えば帰りがけに現チャリに乗りながら見た気がするなぁ～」
とニマニマしながらつけたした。

それが三日前のことだった。

塾に着いて授業二時間もらって、昼ごはんを食べている時、あおが話をもってきた。
花火、友達と行くけど、一緒来ない？
何時から行くんだ。
七時前。
ん～
あおは前々から花火を見たがっていた。なので自習を早めに切り上げて、えづこ経由で帰りがけに見ようかという話はしていた。だが、一緒に見に行く友達が見つかれば、僕が付き合う必要はない。よって断った。人を一人にしたくないが、自分は一人のほうがよいのである。
もちろん、一人になることは危険である。孤独に固執するあまり排他的になったり、周囲が見えなくなって独我的になったりがちだからだ。しかし、それを十分承知のうえで僕は一人を好む。仲間という存在がいかに大切であるかを実感している。それと同じくらい一人であることがいかに大切であるかも実感している。この両方が均等に必要なのだ。これを知らない一人は、何人群れても危険な独

りである。花火を、友達とわいわい見るのもよし、家族で和やかに見るのもよし。だが、この年、この夜を自分にプレゼントするのも、また、いいと思う。今年は、僕にとって特別な人生の節目なのだ。

さて、まったく自由となったこの夜をどう過ごそうか。

楽しい悩みごとをもてあそびながら、今週最後の授業である英作文の教室へと階段を上っていった。できれば最後まで自習をしたい。だがそうなると花火は見れない。自習をするという前提は揺るがないが、花火を見たいという気持ちを捨てきれずに階段を上りつめる。帰りがけに見れるよう早く帰ろうか。それとも塾の駐輪場の最上階は適宜見物しに行こうか。・・・さすがに花火の一発目から最後まで、えづこで見ようという選択肢はなかった。いや、実はあるのだが、それは条件付である。その条件とは・・・

「はづきくぅ～ん！」

教室の戸口から、いしざきさんが手をふりながら出てきた。「にゃぁー。」と返すと、今度はいしかわさんからごあいさつ。「にょー。」と返して、そのまま笑顔で教室に入った。で、そのまま笑顔で席に着けばいいものを、塚崎が視界に入ったとたん、反射的に顔が凍ってしまった。しまった、と思いながら進行方向で顔を背けた＜条件＞の横をかすめて、席に着いた。しまったと思ったときにはもう、淡い期待は消し飛んでいた。読みかけの文庫本を開いてその文字を見つめながら、あぁぁ～～しまったぁ～～、と改めて猛烈に後悔した。ものすごく傷つけてしまったにちがいないと思った。塚崎がこちらを見ると、ぱぁっとハイテンションになってしまう。へたするとニヤけてしまう。それを抑えるために、いっつも表情を消してしまう。見られたくないのだ、塚崎でなく、常に塚崎に張り付いているトリマキたちに。・・・こんな感じでいつも斬りつけてばかりだったけど、今のできっと、とどめを刺しただろう・・・。

瞬時に天地がひっくり返ったので、ずいぶん動揺した。頭の中が真っ黒だった。が、いつまでもヘコではいられない。授業終了十分

前にやっと、宮井先生の腹づつみを笑う余裕が、できた。

中

夕飯は、外の自動販売機の前に長椅子で、仲間と一緒に食べた。これから授業という奴もいれば、これから花火を見に行くという奴もい、これから自習室にこもるという奴もいれば、家にまっすぐ帰ると断言する奴もいる。みんな、きれいにちりぢりになった。

「はづきは？」「自習だよ」

あな珍らかっという顔もあれば、んな当然のとこを得意気に云うないっとツッコミたげな顔もあり・・・こんな多彩な奴らだから一緒にいるのがたまらない。

みんな一緒、何をするのも一緒じゃないと許さないっと云うベタベタ・ギシギシな集団は、僕は見るのも関わるのも嫌だが（研究対象としては興味がある）、こうやって素直に自分が出せて、しかも互いに認め合うことができる連中といるのはいい。したいことをするのをとがめたりしないし、ある程度理解を示してくれる。さすがにやりすぎはとめてくれる。で、なければ群れることが好きでない僕が彼らと飯を食うということは、ありえないだろう。

やれ花火が、浴衣の女の子が、と盛り上がっている輪からふと目をあげたら塚崎が帰るのが目に入ったので、チキン南蛮サンドをパクつきながら、帰るのを見送った。あいつは、花火を見に行くか、家で自習だろうな、と思いながら、「んじゃあお先に」と長いすの背もたれから腰を上げ、サンドのパッケージをごみ箱に放り込んで、自習室に入った。

朝からその時間を自習に尽くそうと決めていたのは、もちろん花火に興味がないからというわけではない。「花火なんてくだらない」なんて口に出す奴にはなりたくない。花火とか祭りとか、そういった、なんと云おうか、人間の情熱の塊のようなものを馬鹿にしくさった態度というのは、ど――――――っしても好きになれないのだ。

それはおいといて、僕の信条は、楽しむときは心ん底から楽しむ、やるときゃやる！である。今、花火を見に行ったところで、本当に花火を見ていられるだろうか。あーれもこーれも・・・といろいろ考えながら、結局は心配事を見てばかりになりそうだ。そんな中途半端な思いはしたくない。それになにより、今本当にすべきことは何なのかを考えてみると、やはり将来に向かって一歩でも進めるほうが断然理にかなっている。花火を見に行くと決めたら見るに徹することができなくもないが、後が大変だ。やっぱりスッキリした気持ちで花火を見たい。そう思うと、自習したいという気が自然におこってくるのである。何のために、今、何をすべきか考えて行動せよ。これが、高校三年間必死で働いて得た教訓である。

自習室には思ったより人が残っていたが、それでも長机が余るほどだった。昼間から隣で自習していた制服姿の女の子がそのままそこにいたが、僕は席を移動しなかった。・・・せめて、そこにいたかったのである。

心おきなく自習ができるというその時に、僕は自分の心が沈んでいるのに気づいた。やっぱり、あの時傷つけたのは相手だけではなかったようだ。見過ごすことのできない痛みが、僕を光のないどん底へズリズリ押しやる。あの時変な顔をしなかったならば、もう少し状況は変わっていたのかな。・・・本当は行きたかったんだ、一緒に。でも、やっぱり日頃の行いだね。

行けなかった。

ちょっとのことだった。ちょっとのことでできなかった。後もうちょっと、のちょっとを埋められなかったのは何だろう。受験もあとちょっとで、今もあとちょっとで・・・。やはり、それは日頃の行いというやつだろう。そうしたいと思うだけでなく、実際にそうするよう行動しているのが大切だ。あとちょっとだと思えても、そのちょっとは実はものすごく大きな隔たりなのだ。（少なくとも今回は＜ちょっと＞どころではないのだが）よほどの強靭な意志でな

い限り、そのちょっとは埋まらない。その意思も突拍子なものでなければ、日頃から培われるものだから、いわゆる火事場の馬鹿力をあてにしてはいけない。なりたきゃ、なれ。やりたきゃ、やれ。ということで、まずは手始めに今夜は自習だ！と気をひきしめ直して、久しぶりに国語にとりかかった。

開いたのは、今まで買った中で唯一縦書きの参考書である。まあまあよりもきちんと的を射た答案を作りたいと思って、買ったのだ。文を読み込んで、答案作って、ふと時計を見て、戻ってくるなら今ぐらいかなぁ――――と考えているのに気づいて、このウマシカ野郎が！とかぶりを振って、また答案を作って・・・まだ沈みっぱなしの心を一応気遣って、答案の端に書き添えた。

信じるかどうか、今日はこれが問題だ。

それぐらい答案作りが進んだころ、二・三人がゴソゴソと支度をして教室を出ていった。ゴロゴロ・・・という戸の音が静かに響く。そろそろ花火を見に行くらしい。さすがの僕も、花火の音が聞こえてきたら自習を続けることは難しくなるだろうと思った。ゴロゴロ・・・ゴロゴロ・・・・。それにしても戸の出入りが多いな、と思っていると、後ろ上から「寒いね」ととりさんの声がした。首をねじって見上げると、とりさんは鼻の下にキラキラと汗の小玉をつけて、ちっとも寒そうじゃなかった。ああ、そうか、二枚も上着を着ている僕が寒いのか、とわかった。小声で、今来たの？ときいたら、小声で、今来たの、と返ってきた。

今から何すんの？

自習だよぉ。

花火見ないの？

見ないよ。僕も自習だよ、でも花火見たいなぁ、駐輪場から見えないかなぁ。

二人でこんなことをコショコショと話していたのがうるさかった

のか、ここらへんでななめ前の席にいるいまきさんがふり返って、話しているとりさんと僕をじぃっと見た。
六号館の屋上からだったらバッチリだよ。　へえ、行けるの。と言葉を切って、自習の邪馬よ、シッシととりさんを追い出した。とりさんはすねたように口をとがらせて追い出された。
時計を見ると七時四十分、花火が始まる時間が過ぎていた。ちょっと外の様子を見てこようと思って、とりさんが出てったのと反対側の戸へ私は向かった。後ろの席で本を読んでいる人がいる。戸を開けて、戸を閉めた。このまま去ってはいけないような気がして、とってに手をかけたまま閉めたばかりの教室の光景を思い返した。ん、もしや・・・。いや、そうだ。

いる。　今、いるのだ。　あいつが。

下

よるつもりのなかった夜のトイレで手を洗う。そして帰ったはずの人物がいる、その教室に戻った。

戸を開けると、いまきさんが席を立ってこちらへ向かうところだった。狭い通路を互いにゆずりあっていたが、珍しく淑女的ないまきさんに折れて、先に通してもらった。席に着いて三秒呆けていたが、すぐ自習の続きをした。答案を仕上げて一息つくと、誰かがモニョモニョと話しているのに気づいた。ありゃ、僕ととりさんが話していたのは結構迷惑になっていたのかも、と反省していると、「・・・ここは思い切ぃって！」と声を荒げたので、会話主がいまきさんだ、しかも誰かを花火大会に誘うことを促しているというのがわかってしまった。あのいまきさんがそこまですすめているのだから、よほど誘わなきゃもったいないひとなんだろうな、と思ってみた。

それ以降、自習室は澄んだように静かだった。それまで心が騒がしくて、その静けさに気がついていなかったのかもしれない。黙々と自習をした。さすがに国語の答案作りは続けることができなかったが、数学はモリモリ食うようにこなした。ただ、八時四十分になった時、いつもの癖で集中がパッときれ、辞書類をロッカーにしまうべく、席を立った。立つのがまにあわなかった！という感じで慌てて立ち上がったそいつの横をすり抜け、外に出た。後ろでガッチャンっとそいつが何かを落とした音がした。しかし僕は、振り返らずに戸口をくぐった。

外は、階段はもちろんロッカーまで電気がオフになっていて、周りがぼんやりと闇に埋もれていた。荷物を置いて教室に戻ると、戸口でいまきさんがエレベータガールみたいに立っていた。先をゆずると、どうぞ、としなやかな手つきで逆にゆずられた。もう帰ってしまっていたが、その後も私は自習を続け、チャイムが鳴ってからかばんをしょって、外に出た。

自転車を連れてチャリ小屋を出ると、警備員さんに会って、ピーナッツおこしをもらった。花火終わったですかね、ときくと、終わったんじゃな～い？とテキトーに返ってきた。見たかったけど、自習やり貫きました！と胸張って云う私を、警備員さんは目を細めて見つめて、ようがんばった、花火は来年もあるしね、と云って笑った。

あ――よかった、自分のポリシーが貫けて！　やっと一人きりになれた夜道、自転車をこぎつつ、ほうっと大きな息をついて大空をあおいだ。自分がしたいことをやり遂げた。満足だ。ちゃんと自習ができた。しかも、ちゃんと自習をしていたから、一緒にいれた。本当によかった。花火大会に行ってはいないが、受験生である身にとって、最高の花火大会をすごせた。なんたって、夜空ではかなく消えていく花火より、もっとたしかな花火が僕を照らしたのだから。

……まあ、いてくれたのかいたのかはわからない。世界は、放っておいても僕の意思とは無関係にまわるものだ。でも、あの時あの場所にいたのは事実だし、それによって僕の心がずいぶん軽くなっているのも事実だし・・・

と、その時、見上げた空がチカチカ光っているのに気づいた。一瞬雷かと思ったが、すぐにピンときた。

花火だ

藤崎宮の信号が折よく青になり、神宮に向かって一直線にこいだ。まだ終わったわけじゃないんだ！　鳥居の前できゅうっと右に曲がり、傾斜の激しい坂を一気に上りつめた。そこはめーご橋、そして前方には・・見えた！　黄緑色のつぶつぶが、小さいながらも夜空にはじけているのが見えた。花火だ。花火である。白に赤に虹色に、あでやかに夏の空を染め、息つく間もなく現れ消えていく。ちょうどクライマックスだった。僕は自転車にほおづえをついて見入って

いた。　綺麗だった。　本当にそれだけしか頭に浮かんでこなかった。花火の音が体中のすみずみまでよく響きわたった。驚きや戸惑いが、みんなどこかへ飛んでいった。あるのは、どうしようもないうれしさだった。

やがてフラッシュ弾が炸裂し、静けさが戻った。らんかんに腰かけていた女の子が「ねーねー、もう終わっちゃったの？」と名残惜しげに母親に聞く声を背中に、僕は速やかに帰路についた。顔は、ニマニマしていた。

いやぁ～、いい花火だった。自転車をこぎながら、つくづくと感じ入った。高校2年のときの中川家での花火が一番楽しい花火だとすれば、今日のは一番嬉しい花火だ。やりたかったことがすべて、最高の形で叶ったのだ。うれしいったらありゃしない。塗っても塗っても黒い絵の具の下から浮き出るクレヨン画のように、花火が僕の心に次々とあがっている。

一生懸命やった後に悔いは残らないものだ、と川口氏は去り際に云い残していった。それは真に僕の人生にぴったりくる名言だった。なんとなく僕の中にあったものが、言葉を与えられることではっきりと目覚め、さっき芽を出したと思ったら、もう、予想以上に大きな花を咲かせていた。

憶測はいくらでもできる。
だけど、あの日本当に美しい花火を見たのは
揺るぎない真実である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0628b/

花火

2010年10月9日03時19分発行